

四世同堂

老舍著

鈴木擇郎・魚返善雄
實藤惠秀・桑島信一

譯

老舍著

四世同堂

鈴木擇郎・魚返善雄 共譯
實藤惠秀・桑島信一

月曜書房版

四世同堂

第二部 上

昭和26年6月5日 印刷

昭和26年6月10日 發賣

著者	老舍	合
譯者	鈴木 郎・實藤 惠	秀
發行者	魚返 善雄・桑島 隆	一
印刷者	前田 本	治

定價 230 圓

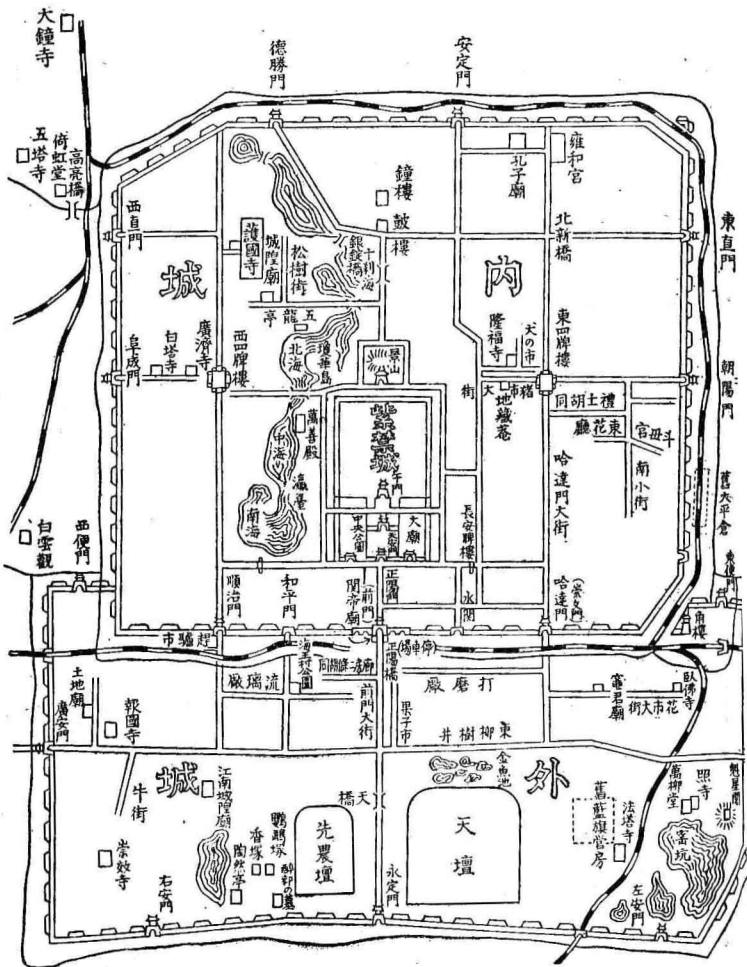
東京都千代田區神田神保町2ノ36

發行所 株式會社 月曜書房

電話 九段 (33) 4428 番
振替 口座 東京 195181 番

印刷 綜合印刷株式會社

北京全圖



至西直門



新街口

新街口南大街

小羊圈略圖

李家

四番地

大槐樹



七番地

錢家

冠家

六翻地
福家

牛家

卐

護國寺

護國寺大街

第二部

「偷生」

上卷

泥人形の前にそなえれば、それでもう歌がはじまる。

「どろどろお菓子とどろ人形

じいさん酒なら

人には負けない！」

これはなんと晴れがましいことではないか！　ところが、母さんは素焼の型を買い、おあしをくれないし、匂い草が見つかつて、

「シャンシャン草の芽

カラカラ罐かん」

とはやしたてれば、父さんはきつとむずかしい顔をして「さわいじやいけない、さわぐんじやない！」という。

二人にはどうして近ごろ母さんが急にけんぽになつて、泥菓子を作る型を買つてくれないのかわからない。

父さんときたらなほさら變だ。いつもおこつてゐるように、なにかといえは、にらみつける。ひいおじいちゃん、は、元來ふたりの「助けの神」なのだが、ちかごろでは、まるで人が變つてしまつたようだ。以前なら、柳が青くなりはじめると、ひいおじいちゃん、きつと二人をつれて、護國寺の市へ行つて、烏瓜の苗や、瓢箪の苗や、

春は、人の世にどんな悲しみがあるかにはかわりなしに、その暖かさ、香りと、色彩をもつて、また北平を訪れて來た。地面や河の氷はみるみる融け去り、河邊や塀の下には、細い草の芽がのぞきはじめた。柳の細枝はクリーム色の小さな粒をぼちぼちと飾りはじめ、雁は空中に列をつくつて、聲を長くひいて呼びかわしている。すべてがいきいきとしてきたのに、北平人だけは、まだ氷の中にとざされていた。

かわいそうなのは順兒シュンアルと奴子ニユツであつた。いつもなら、

もう幾つか素焼の型を買つてもらつて、泥のお菓子を打ち出してあそぶ季節になつていた。赤土で泥の人形や、泥のお菓子をこしらえて、小さな腰かけの上にならべ、塀の下から、まだ葉の捲いている匂い草を探つてきて、

ちいさな鉢植えの松葉牡丹やら、色んな草花の種などを
買ってきたものだ。今年は、ひいおじいちゃん、大根
や白菜さえ蒔かないのだから、草花の苗など買に行く
なんて、思いもよらないことだ。

お祖父ちゃんは、めつたに歸つて来ないし、そのうえ、
歸つて来るたびに、いつも二人におみやげを持つて来て
くれるのを忘れる。今ごろは豌豆の羊か、砂糖入り
のお餅や、蜜の砂糖煮や、乾し柿や、天津大根を賣つて
いる季節ではないか。どうしてお祖父ちゃんは、街に何
も食べる物を賣つていない、なんていうのだろう。順兒
は妹に教えてやつた。

「おじいちゃん、きつと、でたらめをいうのが好きな
んだよー」

おばあちゃんはいかかわらず二人をよく可愛がつてく
れるけれど、いつも病氣ばかりしていて、うなつたり愚
痴をこぼしたりして機嫌がよくない。おばあちゃんはい
つも三叔父さんのことばかり考えていて、三叔父さんが
早く歸つてくればいいと思つているくせに、順兒が思ひ
きつて三叔父さんをさがしに行こうと申し出ると、いけ

ませんという。順兒はおばあちゃんさえ許してくれば、
きつと三叔父さんをさがしてつれて歸れると思つてい
る。順兒には自信がある。姉子も三叔父さんがなつかし
くてたまらないので、兄ちゃんと一しよにさがしに行き
たい。このことで、小さな兄妹二人はいつも言い争う。

順兒が、^{ニユウニユウ}「姉おまえなんか行けないよ、路も知らない
くせに」と言うと、姉子はきつと路を知らないことはな
いと言いはる。「あたち西四牌樓^{シーサイポウ}だつてちつてるよー」

うちじゆうで、二叔父さんだけがうれしそうな元氣な
顔をしていやはりきつている。しかし二叔父さんは、
どうしたわけか、さつぱり歸つて来ない。一度お正月の
時に来て、いばりくさつて、ひいおじいちゃんとおばあ
ちゃんにお辭儀をすると、すぐ歸つてしまつたことがあ
るだけで、乾し菓子とりませ一斤さえ二人に買つて来
てくれなかつた。だから二人が、二叔父さんなんか、
明けましておめでとうつてお辭儀するのはいやだといつ
たのに、母さんたら、二人をぶつといつてきかなかつた。
あんなのくそおじさんだ！ デブおばさんときたらまる
つきり顔も見せない。たいがい、肉が多すぎるから、あ

るけなくなつちやつたんだろ。

二人がいちばん羨やましいのは冠さんのおうちだ。あそこのおうちは、なんてお正月をするのが上手なんだろう。母さんがうつつかりしているとき、二人でこつそり逃げだして、門口で見物したことがある。やあ、冠さんのおうちには、きれいなお姉ちゃんがどつさり来るぞ！どのお姉ちゃんもけばけばしく着飾つて、とてもきれいだ。姉子でさえ見とれてしまつて、あいた口が半日もふさがらなかつたほどだ。お姉ちゃんたちは着物がけばけばしくてきれいなだけじゃない、頭も顔もきれいに化粧しているし、みんなとてもやんちゃで、大きな聲で話したり笑つたりしていて、うちの母さんみたいに肩や眼をしよんぼりさせているのは大ちがいだ。お姉ちゃんたちが冠さんのおうちへ来るときは、きつと何かおみやげを手にさげている。順兒は人さし指を口にくわえて、しきりに息をのみこんだ。姉子は、「一つ、二つ、三つ」と數えている。彼女の知っているいちばん大きい數は「十二」なので、じきに「十二の瓶！ 十二のお菓子の包み！ 十二の箱！」と數えきつて、思わず意見を發表して

しまつた。「あのおうちのお正月は、おいしいものがどつさりあるねえー」

二人は、それに、一度デブおばちゃんもおみやげを持つて冠さんのおうちへ行つたのを見かけた。二人は最初デブおばちゃんが二人になにかおいしいものを買つて来てくれたのかと思つて、走つて行つて、「おばちゃん」と呼んだ。しかしおばちゃんは何も言わないで冠さんのおうちへ入つてしまつた。そこで、二人は冠さんのおうちが羨やましいと同時に、憎らしくてたまらない——冠さんのおうちが二人のおいしいものを取つてしまつたんだ。二人は家へ歸つて母さんにいつけた。「なあんだ、デブおばちゃんは肥りすぎであるけんじやないんだよ、わざとおうちへ来ないんだよ！」母さんは小さい聲で二人に注意した、「決しておばあちゃんや、ひいおじいちゃんに言つてはいけませんよ」二人はこれがどうしてだかわからないで、ただ母さんをととも變だと思つただけだ。デブおばちゃんはずちの人じやないのかな？ もり冠さんのおうちの人になつちやつたのかな？ しかし母さんのいいつけにそむくわけにいけないので、二人

はこの癪にさわることを、おなかにしまつておくことにした。順児は姉子にいつた。「母さんのいうことをきかなくちやいけないよ！」こういつてしまふと、かれは小さなおとなみたいになりなずいて、なにか、たいしたことをおぼえたような氣がした。

そうだ、順児はたしかにたいしたことをおぼえたのだ。うちじゆうのおとなたちは冠さんのおうちのことを聞くのをいやがるけれど、いつもぼそぼそと錢さんのおうちのことばかり話している。錢さんのおうちは、おとなのいうことから聞くと、もう空家になつてしまつたんだそうだ。錢さんの若いおばちゃんは實家へ歸つたし、あの草花を可愛がるおじいちゃんは今急になくなつてしまつたんだそうだ。おじいちゃんはどこへ行つたのか、誰も知らない。ひいおじいちゃんは用事さえなければお父ちゃんとこの事を話している。一度などは、ひいおじいちゃんはこのことをいう時涙を出していつた。そのとき、順児はいそいで逃げだしてしまつた。おとなの涙は子供に見られるのがいやなんだ。母さんの涙だつていつもお勝手の七輪の上にばかり落しているじやないか。

順児の胸がなおさらどきどきして何もいえなくなつてしまふのは、錢さんのおうちの空家が、もう冠さんに借りられてしまつて、日本人に貸してやることになつていと聞いたことだ。日本人はまだ越して來ないが、家屋は今修理中で——窓は低く改造され、土間は日本の「タタミ」とかいふものを敷くように木の板にとりかえられている。順児は一番地へ見に行きたくてたまらないが、もし日本人がいると、こわい。そこでしかたなしに赤土をこねて、妹を左官屋にならせ、小さい家を造らせた。かれ自身は工事監督になつた。妹がどんなに窓を低く造つても、監督はきつと難くせをつけた。「まだ高すぎる、それでも高すぎる」かれは小さい泥人形をこねたが、五分ぐらいの高さだ。「ごらん、姉姐、日本人てちびなんだよ、これつぼつちしかないんだよ」

この遊戲もまた母さんからさしとめられた。母さんは日本人がそんなにちびだと思つていないばかりか、とてもこわいものだと思つてゐるらしく、日本人とおとなになるのを、ひどく心配している。順児は母さんの顔色がただごとでないのを見て、あまりいろいろときくわけ

にもいかず、妹に命じて小さな泥の家をとりこわさせ、自分でもあの五分たらずの泥人形を小さな球にまるめて、門の外へ捨ててしまつた。

かれら二人ばかりでなく、家中を悲しませたのは、常二爺が城門の入口で日本人に打たれたうえ、城門の中庭の通路で土下座させられたことであつた。

常二爺^{チヤンニヤニエ}の生活は非常に規律あるもので、しかもその規律は久しい間保ちつづけられていた。かれはまるで大自然の時計の振り子のように、いつも規律ある運動をつづけていて、永久に倦怠や停頓を知らないかのようである。このため、かれはもう六十を越えているのに、じぶんでは一向老いたとは感じない。かれの年齢はもつぱらほかの人に見せるためのもので、一個の大時計のように人々に時の流れを告げ知らせる。こんなふりであるから、かれの食事がたいへん粗末で淡泊で、住居^{すまい}は火をたくと煉瓦^{れんが}窯^{かま}のようになる部屋だし、着ているのは古いぼろ着物であつたけれど、かれは若い時からこの年になるまで、いつも快活で健康で、まるで畑から掘りたての赤大根のように、土まみれではあつたが、新鮮でこのもしか

つた。

元旦になると、かれはいつも夜なかから神を迎え、祖先を祭り、それから本場の手搾りの胡麻の油であえた野菜入りの餛飩^{ヂョウソウ}を幾つとなく食べる——かれの少しばかりの豚肉は正月二日に福の神を祭つてから、ワンタンを作つて食べるのにとつておかなければならないからだ。精進料理の餃子を食べてしまうと、かれは必ず夜通し起きている。かれはばくちも打たないし、ほかに用事があるわけでもないが、どうしても夜通し起きている必要がある。それはかまどに火を赤々と燃やしつづけるためと、壁に貼つた、かまどの神様の像の前に、いつも線香が煙を立てているようにするためである。かれはかまどの神様や福の神様がほんとうに靈驗あらたかなものだと思つてゐるわけではないが、部屋の中に光と暖かさがほしいのだ。かれは爆竹や、何斤という赤い大きな蠟燭を買ふ金がないので、一本の線香と、かまどの薪や炭で新年を迎え、新しい年とじぶんの心が、ともに明るいものであれかしと祈るのであつた。夜なかを過ぎて、眠くなると、かれは外へ出て空の星を眺める。冷たい風に吹かれる

と、また元氣がよみがえつてくる。部屋に歸ると、お正月のために準備しておいた固豆を一つかみ手にとつて、ぼりぼりと音を立てて咬み砕く。かれは固豆がそれほど好きだというわけではないが、じぶんの丈夫な齒を得意に思っているのだつた。

夜が明けかかると、かれは帶をきゆつとひきしめて、小道ずたいに大鐘寺^{ダイネンシ}へ「遊び」に行く。誰もこんなに早くお寺へ「遊び」に来るものはなかつたし、かれ自身もべつに豆汁の屋臺や、長い棒に數珠のようにさした赤いさんざしの實や、鳥の形をした凧や、風車や、着飾つた男女を見たいわけではない。かれはこうして一里ほどの路を歩いて、その古い寺を眺めただけだ。そのお寺がまだ残つている限り、世の中には何の變りもないように思われて、かれは何となく安心できるのであつた。

お寺の門が見えると、かれはそこから引返し、道すがら親戚や友人の家に寄つて年賀をする。十時ごろになると、かれは家に歸り、少しばかり物を食べて、ぐつすりとい眠りする。正月二日には、朝早くから福の神を祭り、大きなどんぶりに二、三杯もワンタンを食べると、

城内へ年賀に行く。祁家^チが必ず最初にゆく家にきまつていた。

今年は、しかしかれは大鐘寺^{ダイネンシ}にも行かなかつたし、城内へ年賀にも行かなかつた。かれの世界は變つてしまひ、なにがなんだかさつぱりわけがわからなくなつた。夜なかには遠くでいつも銃聲が聞こえる。時には大砲の音がすることもある。かれには誰と誰が打ちあつているのかわからないが、心はいつも落ちつかない。おびえた子供のように、眠っているうちに突然びくつと眼がさめることがある。ときには、自分の犬やお隣りの犬が必死の聲をはりあげて、人の氣持をぞくぞくさせるほど吠えたりすることもある。翌日になると、誰かが「夜なかにまた兵隊が通過してましたぜ」とかれに教えてくれる。どんな兵隊だろうか？ 味方のだろうか、それとも敵のだろうか？ 誰も知つていないものはない。

夜もおちおち寝られないが、晝間でもかれの心は落着かない。いろいろな流言が飛んでいる。かれの門前はひつそりと靜まつているが、一臺の荷馬車でも、一人の通行人でも、通りかかるたびにそれぞれの流言をもたらし

た。北苑ペイコヤンに敵兵が何人來たとか、西苑レイコヤンでは飛行場をつくつているとか、敵兵は何千人の人力をかりだそうとしているとか、また或るものは、常二爺の門前の往來に沿つて軍用道路ができることになつたとかいふ。人力狩り？かれの息子は血氣盛りの屈強な若者だ。なんとかして息子をかくしてしまわねばならない。軍用道路をつくるつて？かれの三、四段の畑は往來ばたにある。多くとは言わない、一段でも取られたらそれこそやりきれない。かれは家の門から一步も離れるわけにいかないときめた。夜も晝もじぶんの息子と畑から目をはなすことが出來ないからだ。

また、西苑レイコヤンの西北の方で、味方の遊撃隊をかくまつたといふかどで、日本人が二、三ヶ村の住民を皆殺しにしたといふ話もある。これは、常二爺からみると、あながち流言とはいきれない。夜なかの銃聲や砲聲はいつも西北から聞こえてくるではないか。かれは、味方にはまだ日本の鬼めらと命がけで戦う遊撃隊が残っていると信じたかつたが、同時にじぶんの村も敵から皆殺しにされるのではないかとおそろしかつた。考えてもみなされ、

徳勝門トクシヨンメンのすぐ外にある監獄は、味方の遊撃隊の手でぶちあげられたではないか、わしの家は徳勝門から一里あまりしかないんだ。村中皆殺しにされることもないとはいえない。

かれは話にきくばかりでなく、じぶんの眼でもみた。往來を通つてたくさんの人が西北の方から城内に向つて行く。かれらは老人子供の手をひき、荷物をかついだり背負つたりしている。きいてみると、これらの人々は少くとも中流以上の農家で、家やしきも田畑ももつていた。かれらは田畑をただ同然の値段で賣りはらい、家やしきを捨てて、城内へ移住してゆくところだつた。これも殺されるのがこわいからだ。これらの人々がかれに語つたところによれば、日本人はこれから地租の代りに、食糧を徴發しようとしており、稻わらから麥わらまで全部持ち去つてしまふ。誰が畑を何段歩つくり、食糧を何俵收穫するということまで、人を使つて監視していて、收穫すれば、その場から持ち去られる。畑をつくるのをやめても、かれらは同じように食糧を要求する。納めなければ、いじめころされるといふのだ。

常二爺は、心臓が口から飛び出しそうにびつくりした。かれはうしろ手を組んで畑のふちを歩きまわった。じつくりと考えてみなければならぬ。かれは叡智を持つていたが、頭の働きの遅かった。自分も城内へ越して行くべきであらうか。かれは西山に向つてかぶりを振つた。山も、じぶんも、じぶんの畑も、金輪際動くことは出来ない！ 動くわけにいかない！ 實のところ、かれの何段歩かの畑は、なんら彼に物質上の享樂をあたえてくれたことはない。かれは一年を通じてせいぜい二、三回豚肉を食べることができただけだし、かれの一張羅の着着というのは、あの何回洗つたかわからない青木綿の長衣があるだけだ。しかしかれはそれでも自分の畑から別れるのは心残りだ。自分の畑から離れたら、たとえ今より、もつとうまいものを食べ、好い着物をきて、立派な家にすんでも、かれは楽しいとは思わないだろう。畑あつてこそ自分のできる仕事があるので、畑がなければ根がないのも同然だ。

いや、いや、どんなことでも自分の身にふりかかつて來ることがないとはいえないが、日本人が作物を掠奪す

るということだけは、ねなしごとだ、根も葉もないつくりばなしだ。そんな噂を信用して、びくびくしてはいけぬぞ。土城を眺めながら、かれはうなずいた。かれはその土城が金、元時代の遺蹟であることなど知らないが、幼い時から日ごと見なれて、今になつても大風に吹き散らされずに残つてゐることだけはわかつていた。かれもこの土城のように、永久にこの土地に立つていなければならぬ。土城から眼を返して、かれは足もとの畑をみた。麥の芽、短い、黒ずむほど濃い緑の麥の芽は、一うね一うねと、隣家の畑まで續き、更に遠い遠い畑につらなつていて、それから……かれはまた西山をそこに見出す。ねなしごとだ！ ねなしごとだ！ これは自分の畑だし、あれは王家のだし、あれは丁家のだし、あれは……西山だ。これこそが本當のことで、ほかのことはみんなねなしごとだ！

だが、萬一敵が本當に食糧を掠奪に來たら、どうしようか？ たとえ掠奪されなくても、兵馬に踏み荒らされたら、どうしようか？ かれにはどうしようもない。かれの背中はずかしくなり、汗が出そうな氣がする。か

それは夜晝自分の畑を見張つてゐるよりほかに何もできない。誰かが本當に掠奪に來たら、わしは命がけで抵抗しよう！　こう決めると、かれはまた心が軽くなり、往來を歩きながら馬糞を拾いはじめた。ひとかたまりの馬糞を拾いながら、かれはふりかへつて自分の畑を見て、それから自分に言つてきかせた。みんなねなしごとだ、畑はなくなりつこない！　金や銀はなくなりやすいが、この黒ずんだ黄色い畑だけは永久になくなる筈がない！

もうすぐ清明節で、かれは一層忙がしくなつてきた。

忙がしくしていれば、かれの心はかえつてずつと落着いていられた。夜なかにはまだ時々銃聲が聞こえたが、敵は食糧徴發の人員を派遣して來なかつた。麥の芽はもう地面にしがみついてはおらず、一せいに春風とともに立ち上り、青々と光つて、一列一列の緑の麥が、一筋一筋と黄色い土にふちどられてゐる。世界にこれより美しいものといつたら何があろうか？　それに自分の畑を見れば、きちんと手入れが行き届いて、麥のうねがなんて眞直ぐなんだろう！　この畑の地味はもととあまり好いものではなかつたが、かれは、土壌がわるいからといつ

て、べつにいやげがさしたり、骨おしみをすることはなかつた。おてんとう様が雨を降らせなかつたり、或いは雨が多すぎたりすれば、かれもひでりや大水を防ぐすべはなかつたが、しかし天候がひどく惡すぎない限り、かれは精かぎり根かぎり働き、一滴の汗をも惜しまなかつた。じぶんの畑を眺めながら、かれは、じぶんで誇らしく、うれしく感じて、それは當然であると思つた。かれの畑は食糧を産み出すばかりでなく、かれの手柄をも表現していた。かれと畑とはおなじことであり、この畑さえあれば、日月星辰すらもじぶんのものであつた。

祁家のあの墓地に對しても、かれはじぶんの畑に對するのに劣らず精を出して手入れをした。「もうすぐ清明節だ！」かれは心に言つた、「土饅頭に土盛りをしてまわりを叩いておかねばなるまい。祁家の人たちがお参りに來ようが來まいが同じことだ！」かれは墓に土を盛り、周圍をきちんと叩きかためた。叩きながら、かれは祁家の人々をなつかしく思い出した。今年の正月二日には、かれは年賀にも行けなかつたので、心にいつも濟まなく感じていた。かれは祁家の人々が清明節に墓參に來るこ

とができればいいかと念じている。もしもかれらが來ることができるとなれば、それは城内の人々が城外に來ることをこわがつていないことを説明するもので、日本人が食糧を徴發するというのも十中の八九は流言にすぎないことになる。

かれの家から十二三町離れた馬家の長男が咽喉の病にかかつて、もう一晝夜あまりも食べ物がのどを通らなかつた。馬家は何段歩かの畑をもつていたが、暮してゆくのには足りないもので、その長男が城内の裁判所で巡査をつとめて、月々三圓、五圓と仕送つていた。長男の病氣が重いので、家中が慌ててしまい、常二爺の智慧を借りて來た。常二爺は畑仕事に忙がしかつたが、人の命にかかわることでは、ほおつておくこともできなかつた。かれは醫者ではなかつたが、この年になるまで、いろいろと經驗をつんでいたし、人柄もよかつたので、近所の人たちは、かれを醫者よりも信頼しているとさえいえるほどであつた。かれはたくさんさんの藥草の處方をおぼえていて、地面から掘りだしてくれば病氣をなおすことができ、安あがりでもあつたし、手間もかからなかつた。か

れからみれば、城内の人だけが醫者というものに用事があるのだ、その唯一の理由は城内の人は金をもつてゐるからだつた。馬家の息子の病氣について、かれはあれやこれやと處方を考へてみたが、どれもあてはまらない。咽喉の病氣は重病だ。最後にかれは六神丸を思ひだした。かれはいつた。

「これは藥草じゃねえから、城内でなけりや賣つていませんわい。めつぽう高いんでさあ！」

高くてもしかたがない。命が大切だ！馬家の人々は常二爺の口から藥の名を聴くと、まるでもう病人の命をとりとめることが出來たかのように感じた。かれらは少しも六神丸を疑わない。常二爺がこうと言つたからには、たとえ七神丸だつて同様に病氣がなおせるんだ！問題はどこでその數圓の金を都合して來るかということと、誰に頼んで買つて來てもらうかということだけだ。

あちこちからよせあつめて、ようやく十圓の金がある。誰が買に行くのか？それは常二爺にきまつてゐる。人々の論理では、常二爺がその藥の名を知つてゐる以上、どこへ行つて買うかも知つてゐるにきまつてゐる